

平成三十年度特別企画展

能野焼 再発見

明治期に廃窯した古の能野焼の魅力

会期：2018年4月3日～7月19日



種子島開発総合センター



ごあいさつ

当センターには、140点余りの能野焼が収蔵されています。常設展にも「能野焼コーナー」を設けて展示を行っていますが、主な器種を並べて展示するに留まっていました。

平成29年9月、岡山県備前焼ミュージアムの白井洋輔館長が来館されたのを機に、センター職員が所蔵品の能野焼について調査を始め、現時点での成果を企画展として、発表することになりました。

能野焼については不明な点が多く、地元の人にもその価値や歴史的な位置づけについては、あまり知られていないのが実情ではないでしょうか。この度の特別企画展がその理解の一助となれば、能野焼の地元の博物館として、この上ない喜びであります。

最後に、本特別企画展開催にあたり、貴重な資料を提供してくださいました皆様に心からお礼を申し上げますと共に、能野焼研究のきっかけを下さいました、備前焼ミュージアムの白井館長に深く感謝申し上げます。

平成30年4月

西之表市教育委員会 種子島開発総合センター（鉄砲館）

所長 松下 成悟

日本陶器界最後のフロンティア

能野焼

「能野焼」は、西之表市住吉能野で明治35年まで作られていた陶器です。種子島特有の砂鉄を多く含んだ粘土を用い、壺・甕・食器・花器・仏具・動物像・しびん・墓など、島内で使用するありとあらゆる器種を作っていたのが特徴です。どっしりとした男性的な力強さと、生活に根差した素朴さを持ち、昭和40年頃の民芸ブームで注



「享保十一年」銘入耳付壺

写真出典：『日本やきもの集成 12』
(1982)

目されました。その始まりは定かではありませんが、享保11年(1726年)と線刻された大甕が存在したことから、少なくともこの時期には窯が開かれていたと考えられます。制作技法や器形などから、南方系(琉球・東南アジア)と朝鮮系、両方の影響を受けていると言われていますが、影響を受けた時期・経緯等は不明です。

朝鮮からの影響

能野焼にどのようにして朝鮮系の技術が伝わったのかについては諸説ありますが、以下の3つが有力とされています。

- ① 豊臣秀吉の朝鮮出兵(文禄・慶長の役)の際、島津家家臣として出陣した16代島主・種子島久時が、朝鮮人陶工を直接連れ帰った説。
- ② 島津家が朝鮮出兵の時に連れ帰った陶工が、琉球へ焼き物指導に行った帰り、種子島へ立ち寄った(あるいは漂着した)説。
- ③ 享保16年、島津家が陶業保護を打ち切った際に、苗代川から陶工が移り住んだ説。

かつて行われた聞き取り調査では、「その昔、一代の陶工が苗代川より渡島し、今の住吉能野に窯を築き、地元の人々を使用して焼物をはじめた」という証言もありました。また、能野には「陶技を伝えてくれた朝鮮人の墓」と言い伝えられる墓も存在しています。

参考文献 浦添助直（1980）『郷土能野焼』



ちょっと脇道に逸れますが、
「薩摩焼」のお話です

能野焼を語る上で、薩摩焼は避けて通れません。

ここでは簡単に薩摩焼についてご説明します。

薩摩焼の始まり

豊臣秀吉の朝鮮出兵に従軍した島津義弘が、朝鮮人陶工約80名を連れ帰り、串木野で作陶させたのが薩摩焼の始まりと言われてい

す。
その後、帖佐・堅野・苗代川等に居を移し、各窯が築かれました。それぞれの窯の特徴から、薩摩焼は大きく分けて帖佐系、堅野系、龍門司系、苗代川系、平佐系等に分けられます。その中でも、能野焼に影響を与えたと言われているのが苗代川系の薩摩焼です。

ちなみに、あの有名な沈寿官窯も、初代が苗代川（現：日置市東市来町美山）に窯を築き作陶を行ったので、苗代川系の窯ということになります。

苗代川焼について

能野焼に影響を与えたとされている苗代川焼は、以下の2つに分けられます。

	用途	特徴
白もん <small>しろさつま にしきで</small> (白薩摩・錦手)	藩主の御用品	・白陶土を使用
黒もん <small>くろさつま</small> (黒薩摩)	庶民の日用品	・鉄分を多く含む胎土に鉄釉 <small>てつゆう</small> を施す

言うまでもなく、能野焼に影響を与えたのは「黒もん」の苗代川焼です。



苗代川系 新堂平窯 はりつけうんのやうもんはんぐ 貼付雲竜文半胴

(17世紀) れいめいがん 黎明館所蔵

能野焼の楽しみ方



鑑賞ポイント その1

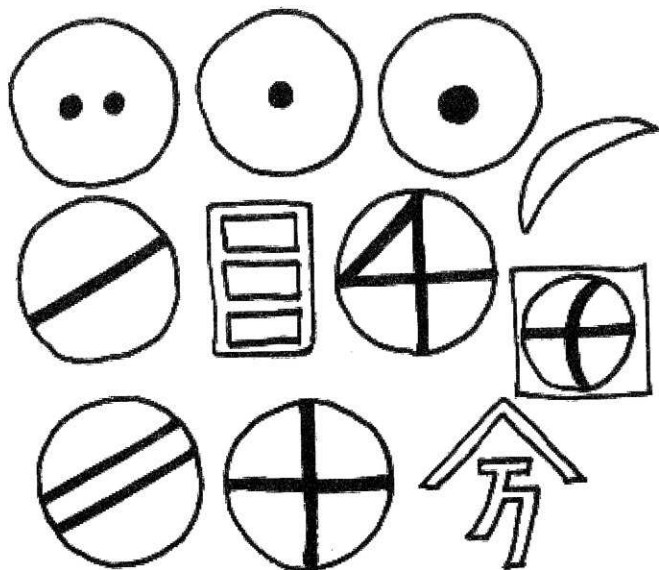


かまじるし
窯印

能野焼には、肩の部分にハンコのような「^{かまじるし}窯印」を押された物がしばしば見られます。これは、共同で窯を使ったときの目印として付けられたと考えられています。

同じ印を持つ物は、同じ人（あるいは同じ集団）の製品で、近い時期に作成されたと考えられます。ただし、異なる窯印のどれどれが同時期であるかは分かっていません。





能野焼の窯印には次のようなものがみられる



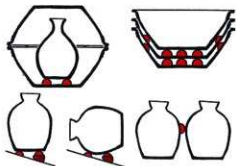
鑑賞ポイント その2

かいめ 貝目

能野焼をひっくり返してみると、底に貝が白くこびりついている場合があります。

これを「^{かいめ}貝目」と言います。窯詰めをする時に、器と器の間に挟んだ貝の痕跡が、貝目として残っているのです。

貝目の使用は、朝鮮古来の陶技の1つと言われており、^{なえしろがわ}苗代川焼の古い時期のものには良く見られます。貝目は、底だけでなく、^{こうえん}口縁部にも見られます。苗代川焼で使用される貝は、イタヤガイやハイガイ等、大型の二枚貝であるのに対し、能野焼ではナガラメが多く使われています。



窯詰めをする時に、器と器の間に挟んでいる貝の痕跡が貝目





鑑賞ポイント その3.....

● 装飾のバリエーションの豊かさ

《二重透かし》

能野焼の装飾における最上級の技法がこの『二重透かし』と言えるでしょう。現存するものは3点のみとされ、そのうち1点は市指定有形文化財になっています（常設展に展示中）。

この技法は、現在には伝承されておらず、秘法とされています。



《貼付文》

型抜きした梅の花や粘土紐などを貼り付けて、模様を描き出しています。梅が最も多く作られています^{からくさぼたん うんりゅう}が、他にも唐草牡丹や雲龍なども存在したようです。また、この技法は、苗代川焼にもよく見られます。



107. 貼付文半胴 能野焼 鎌倉期 天保16年

からくさぼたんうんりゅうつもんはんづ
唐草牡丹貼付文半胴（能野窯）

向田民夫著『日本の陶磁9 薩摩』（1978）



《線刻文(釘彫り)》

陶工達の最も自由な発想で施された装飾が、線刻文と言えるでしょう。文字を彫り込む場合もあります。



つるかめぼりちん しじこ
鶴亀彫紋四耳壺

右肩に亀が描かれているので、鳥は鶴であろうと推測されていますが、どうしても鶴には見えません…。ひょっとして、これを描いた陶工さんは、鶴を見たことがなかったのでは？

出典：三宅忠一（1981）



《立体造形》

ソテツや竹筒等を表現しながら、^{はなたて}花立としての機能を持たせたものと、動物像やかまどの神様等、純粹に像として制作されたものがあります。竹筒を模した花器は、苗代川系の中にもよく見られますが、ソテツを模したものは能野焼独特の^{いしよろ}意匠です。



鑑賞ポイント その3……………

● ねんどひも粘土紐積み上げ成形とロクロ成形

能野焼の成形方法は、

- ① ねんどひも粘土紐積み上げ成形
- ② ロクロ (ろくろ 轆轤) 成形

の2種類が見られます。

粘土紐積み上げ成形というのは、その名の通り、底になる丸い板状の粘土の上に粘土紐を積み上げていき、その境目を馴染ませながら成形していく方法です。内部を見ると、積み上げた粘土紐の境目なじが分かることがあります。この方法によるものは、よく見ると外形も若干凸凹し



ており、それがかえって能野焼の素朴さを醸し出しています。

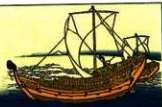
ロク口成形というのは、粘土を回転する台に乗せて、遠心力を利用しながら成形する方法です。均一で薄い器壁の製品を作ることができます。粘土紐積み上げ法で大まかに形を作った後、ロク口成形をする場合もあるようです。

かつての聞き取り調査の中で、古老が製陶作業を行っていた当時の思い出として「(前略)粘土を運ぶ人、杖をついて粘土を足踏みする人、藁屋根の下で、**ロク口を蹴る人**と分業的に持場が定められており(後略)」と証言していることから、窯が閉じられる直前には蹴ロク口(足で蹴って回転させるロク口)が使われていたことが分かっています。ロク口成形のものは、能野焼の中でも薄手の造りになっています。

【引用】浦添助直(1980)『郷土能野焼』



遠くまで旅した能野焼



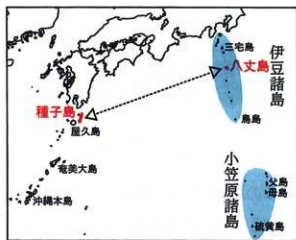
能野焼は、種子島全島、屋久島、さらに遠くは沖縄まで流通した、と書物には書かれていますが、島外への流通ルートの詳細は分かっていません。しかしこの度、伊豆諸島南部の八丈島はちじょうじまに、能野焼と思われる片口かたぐちが保管されていることが分かりました。写真のみでの鑑定になりますが、能野焼の可能性が高いと考えられます。



八丈島で確認された能野焼
と思われる片口

資料提供：石井 正徳 氏
調査協力：八丈町教育委員会

じつは八丈島には、沖縄の壺屋焼つぼやの荒焼大甕あらかちがーみが多数存在します。
本土経由での流入、または沖縄県人の小笠原への移住に伴う流入な



どが考えられ、昔から沖縄と八丈島との繋がりはずなからず存在したようです。

それでは、種子島と八丈島の繋がり存在したのでしょうか。

『種子島家譜』では元禄十五年に

種子島の商人榎本重八（船頭水夫八人）、去年十一月八日赤尾木を發して將に上方に赴かんとし（中略）八丈島に漂着し、江戸に出づ。

という記録が残っています。この時は、乗組員が無事に種子島まで帰ってこられたので記録として残っていますが、記録に残っていない漂着も数知れずあったのではないのでしょうか。

壺屋焼に比べて、八丈島で見つかった能野焼は数が少ないので、種子島 - 八丈島の流通ルートがあったというよりは、

- ① 能野焼を積んだ種子島の船が、八丈島に漂着した。
- ② 八丈島の船が種子島に漂着し、乗組員が能野焼を持ち帰った。

等の可能性が考えられます。いずれにしても、偶発的にこの能野焼が八丈島に持ち込まれた、と考えるほうが自然と言えるでしょう。

謎の真相は、この物言わぬ能野焼だけが知っているのです。

能野焼で偶然に繋がった種子島と八丈島ですが、種子島焼の時代になっても、不思議な縁がありました。中里氏が新しく種子島に窯を築く際、八丈島八丈窯の窯元、青木正吉さんと金打忠政さんのお二方が、種子島に来島し、ご尽力くださったそうです。右の写真は、八丈島の石井正徳さん（片口所有者）所蔵の徳利とくい呑みで、青木さんが種子島で作陶された際の作品だそうです。



備前焼そっくりな能野焼



能野焼の大皿自体も珍しいのですが、何より皿に浮かび上がった4つの丸い模様が特徴的な逸品です。こういった模様は「牡丹餅」と呼ばれ、備前焼における特徴的な技法の1つとされています。「牡丹餅」は、作品の上に小さな粘土や他の作品を置くことで焼きムラが生じ、それが色の変化として現れたものです。

備前焼ミュージアムの白井洋輔館長をして「これは備前とどこが違うのであろうか。」と言わしめた、能野焼の大皿。しかし、裏側を

見てみると、びっくりするほど無頓着で、
荒々しい砂高台となっています。

これぞ「能野焼の面白さ」と言えるでしょう。



「しびん」のお話

能野焼の中の変わり種に、「しびん」があります。一見、花を活ける花器のようにも見えますが、あくまで尿瓶しびんです（おそらく使用済み）。

古典落語の演目に、「しびん」という噺はなしがあります。



江戸時代のこと。小道具屋にて、勝手に「尿瓶」を「花瓶」と勘違いしたお侍さんが、大金をはたいて購入し、「南蛮渡来の非常に珍しい花瓶」として大事に磨

いて花を活けていました。それを見た出入りの商人が、
「それは、新しい（未使用）のでしょうね（汗）・・・？」

と尋ねると、お侍さんは

「いやあ、古いものだよ！シビンの作だよ！」

と、嬉々として答えました。



このあとお侍さんは本当のことを知って激怒する、という続きもあるのですが、ちょっととぼけたこのお侍さんが、能野焼の「しびん」を見たら、やっぱり花を活けてしまいそうだと思いますか？

むかしのお墓

野間焼のカメ墓^{ばか}

これは、中種子町野間で焼かれた野間焼^{のまやき}のカメ墓です。昭和35年頃には、6基のカメ墓が野間の墓地で確認されています。これらは、能野で陶芸の修業をした石堂八兵衛門という人が制作したと言われています。民俗学者・下野敏見氏^{しものとしみ}は、八兵衛門が独自に能野焼の陶墓^{とうぼ}を発展させて制作した物ではないかと推察しています。

能野焼の陶墓^{とうぼ}

これは、素焼きの能野焼製の陶墓です。形にはいくつかのバリエーションがあり、能野焼窯元の先祖の墓に多く見られました。

能野焼の甕棺^{かめかん}

この大甕は、亡くなった人の遺体の中に入れて墓地に埋葬する為の甕棺^{さかん}（座棺）です。大甕の上ですり鉢型の蓋をして使用します。甕棺の肩部に数字が手彫りされていますが、これは焼成時にバラバラに窯詰めした棺と蓋の組み合わせを識別するためだと考えられます。甕棺は、火葬が始まるまで利用されていました。



能野焼の終焉

明治20年代になると、海上交通の発達に伴い島外から様々な商品が流入するようになり、島内の日用雑器を一手に担^{にな}ってきた能野焼も転機を迎えました。

こうした時流の変化を受け、能野の窯元は、明治33年頃から始まった種子島縦貫^{じゅうかん}道路工事に伴う排水用の土管^{どかん}制作を請け負うことになりました。従来の窯のままでは不都合であったことから、一部窯の改造をするなどして土管制作に窯存続の命運を賭けました。しかし、道路工事の終了と共に土管の需要もなくなり、明治35年に閉窯に追い込まれました。

故・山本秀雄氏（能野出身）は著書の中で、

能野などむしろ雑器の伝統を守っていたならば、（中略）生き残る道もあったのではなかったかと。

とその幕切れを惜しんでいます。

【参考文献】山本秀雄編（1979）『種子島焼』



種子島陶芸史の新たな一步 種子島焼

明治35年に能野焼の歴史は幕を閉じましたが、昭和40年代になり、「能野焼を復興させよう！」という機運が高まりました。その活動の中心人物であった山本秀雄氏（能野出身）が、日本陶磁器界の重鎮、小山富士夫氏に相談。その後、小山氏の紹介により、唐津焼窯元の五男であった中里隆氏を陶工として迎えることとなり、昭和46年西之表市古園に「種子島焼」が誕生しました。

「種子島焼」は、能野焼とは系統を異にしますが、種子島における陶芸の歴史において、非常に大きな出来事であると言えるでしょう。その後、種子島にも再び窯元が増え、現在に至ります。

「種子島焼」誕生に大きな役割を果たされたお二人の作品をご紹介します。



能野焼 そっくりさん

鉄砲館所蔵の焼物の中から、能野焼にそっくりなものを集めてみました！これらの区別がつけば、あなたも目利きができる！・・・かも？

のまやき 野間焼

昭和20年頃まで中種子町野間で生産されていた陶器。使われた粘土も能野焼とほぼ同じで、見た目では判別するのはなかなか困難です。

難易度★★★★★



なえしろがわやき 苗代川焼



能野焼が影響を受けたと言われるだけあって、とても良く似た雰囲気です。能野焼に比べると器形が整っていて、持った時にやや軽い印象を受けます。

難易度★★★★☆

✓ たかおのやき 高尾野焼

苗代川から高尾野に移住した陶工が始めた窯とされています。豊かに丸みを帯びた器形と、^{うんすけとつくり}雲助徳利の口作り（巻合せ）が特徴。黄蕎麦釉を流しかけた物が多く見られます。

難易度★★★★☆



✓ ルソン壺



桃山時代、千利休や豊臣秀吉が愛したと言われるルソン壺。現地（フィリピン・ルソン島）では、島民が日常的に使う壺ですが、当時の日本では高値で取引されたそうです。

難易度★★★★☆

✓ つぼ や やき りゅうきゅう あらやち 壺屋焼（琉球・荒焼）

壺屋焼は現在的那覇市壺屋町で17世紀後半から焼かれていた陶器です。その中でも、^{やましめ}焼締の^{むゆう}無釉陶器「荒焼」は、能野焼と良く似た雰囲気を持っています。^{かみ}大甕の肩部に取り付けられた蝶のような形の耳と、ヘラ削りの「判」が特徴。この徳利は^{あわもり}泡盛の運搬の他に、いざという時には武器として使えるように作られたもので、『鬼の腕』と呼ばれています。



難易度★★★★☆

✓ ひぜんやき 備前焼

じつはこの壺、能野焼として収蔵されていましたが、昨年岡山県『備前焼ミュージアム』の^{うすいようすけ}白井洋輔館長により、「古備前である。」と鑑定され、備前焼の大家・^{もりとうぐく}森陶岳氏も「間違いなく備前である」と証言されました。ここまで来ると、素人の目では区別ができません……。皆さんにはどちらに見えますか？



難易度★★★★★

展示品目録

【日本陶器界最後のフロンティア 能野焼】

	器種	種類	所蔵	備考
1	沈線文小壺	能野焼	種子島開発総合センター	
2	沈線文徳利	能野焼	種子島開発総合センター	
3	魚耳付花立	能野焼	種子島開発総合センター	

【能野焼の楽しみ方】

4	セイロ	能野焼	種子島開発総合センター	窯印「○」
5	沈線文徳利	能野焼	種子島開発総合センター	窯印「○」
6	円筒形花立	能野焼	種子島開発総合センター	窯印「○」
7	塩壺	能野焼	種子島開発総合センター	窯印「○」
8	耳付沈線文花立	能野焼	種子島開発総合センター	窯印「○」
9	耳付花立	能野焼	遠藤 修	窯印「○」
10	胴丸壺	能野焼	遠藤 修	窯印「○」
11	徳利	能野焼	種子島開発総合センター	窯印「⊕」
12	耳付花立	能野焼	種子島開発総合センター	窯印「⊕」
13	耳付花立	能野焼	遠藤 修	窯印「⊕」
14	沈線文片口	能野焼	種子島開発総合センター	窯印「⊕」
15	魚耳付花立	能野焼	種子島開発総合センター	窯印「⊕」
16	徳利	能野焼	種子島開発総合センター	窯印「⊕」
17	沈線文徳利	能野焼	種子島開発総合センター	貝目
18	すり鉢	能野焼	種子島開発総合センター	貝目
19	壺	苗代川焼	種子島開発総合センター	貝目
20	二重透かし花瓶	能野焼	種子島開発総合センター	
21	貼付梅花文花立	能野焼	種子島開発総合センター	
22	貼付梅花文花立	能野焼	遠藤 修	
23	線刻文花立	能野焼	種子島開発総合センター	
24	線刻文水鉢	能野焼	遠藤 修	
25	蘇鉄型花立	能野焼	種子島開発総合センター	
26	竹筒型花立	能野焼	種子島開発総合センター	
27	壺	能野焼	種子島開発総合センター	粘土紐成形例
28	沈線文徳利	能野焼	種子島開発総合センター	ロクロ成形例

【遠くまで旅した能野焼】

29	沈線文片口	能野焼	種子島開発総合センター	
30	沈線文片口	能野焼	種子島開発総合センター	
31	沈線文片口	能野焼	遠藤 修	

【備前焼にそっくりな能野焼】

32	牡丹餅大皿	能野焼	種子島開発総合センター	
----	-------	-----	-------------	--

【しびんのお話】

33	尿瓶	能野焼	種子島開発総合センター	
----	----	-----	-------------	--

【むかしのお墓】

34	陶墓	能野焼	種子島開発総合センター	
35	カメ墓	野間焼	種子島開発総合センター	
36	甕棺(すり鉢型蓋付き)	能野焼	種子島開発総合センター	

【能野焼の終焉】

37	土管(大)	能野焼	種子島南蛮 住吉窯	
38	土管(中)	能野焼	種子島南蛮 住吉窯	
39	土管(小)	能野焼	種子島南蛮 住吉窯	

【種子島焼】

40	南蛮花生(種子島の土を使用)	種子島焼試作品	種子島開発総合センター	小山富士夫作
41	抹茶茶碗(種子島の土を使用)	花の木窯	個人所蔵	小山富士夫作
42	抹茶茶碗(種子島の土を使用)	花の木窯	個人所蔵	中里 隆作
43	竹筒花生(種子島の土を使用)	花の木窯	個人所蔵	中里 隆作

【能野焼そっくりさん】

44	緑釉雲助徳利	野間焼	種子島開発総合センター	
45	雲助徳利	野間焼	種子島開発総合センター	
46	壺	苗代川焼	種子島開発総合センター	
47	徳利	苗代川焼	種子島開発総合センター	
48	雲助徳利	高尾野焼	種子島開発総合センター	
49	徳利	高尾野焼	種子島開発総合センター	
50	沈線文壺	備前焼	種子島開発総合センター	
51	ルソン壺	フィリピン・ルソン島	種子島開発総合センター	
52	荒焼大壺	壺屋焼	種子島開発総合センター	
53	荒焼徳利(鬼の腕)	壺屋焼	種子島開発総合センター	

参考文献一覧

- 下野敏見 (1960) 『能野焼きとカメ墓について』 種子島科学同好会
- 新野稔明 (1966) 「能野焼随想」 『日本の民芸』 135号 p16-17
- 盛園尚孝編 (1970) 『中種子町郷土誌』 中種子町郷土誌編集委員会
- 新野稔明 (1973.2) 「種子島能野・野間陶考」 『季刊 用と美』 7号 用と美の会
- 向田民夫 (1978) 『日本の陶磁9 薩摩』 保育社
- 山本秀雄 (1979) 『種子島焼』 八重岳書房
- 浦添助直 (1980) 『郷土能野焼』 西之表市立図書館
- 三宅忠一 (1981) 『種子島焼』 財団法人日本工芸館
- 浦添助直・宮城篤正 (1982) 「種子島・奄美大島のやきもの」
『日本のやきもの集成 12九州II 沖縄』 p132-134 平凡社
- 野元堅一郎 (1985) 『特別展 さつまやき—その歴史と多様性』 図録 p23-24
県歴史資料センター黎明館
- 米倉澄高 (1986) 「能野焼と種子島焼」 『陶説』 396 p37-42
社団法人日本陶磁協会
- 渡辺芳郎 (2000) 「薩摩焼貝目小考—その存続年代の考古学的検討」 『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』 51 p.75-91 鹿児島大学
- 小田静夫 (2008) 『壺屋焼が語る琉球外史』 同成社
- 白井洋輔 (2017) 「8 種子島の能野焼と先行する備前焼」 『平成29年度特別展 備前焼再発見』 備前市立備前焼ミュージアム

協力者ご芳名（順不同、敬称略）

備前焼ミュージアム	館長	白井	洋輔
東京都八丈町教育委員会		林	薫
東京都八丈町		石井	正徳
南種子町教育委員会	教育長	遠藤	修
種子島南蛮 住吉窯		山本	芳幸
〃		山本	達也
種子島開発総合センター	参与	鮫嶋	安豊

企画・調査・編集

西之表市教育委員会				
種子島開発総合センター「鉄砲館」	参事	沖田	純一郎	
〃	主任	鮫島	斉	
〃	臨時職員	中國	愛(資料調査・展示主担当)	
〃		上妻	文乃	
〃		篠原	典子	
〃		荒木	真紀子	
〃		藤本	まゆみ	
〃		古元	真知子	
〃		押川	マミ	
〃		元吉	真澄	

あとがき

種子島のご年配の方のお宅では、案外一つくらい押し入れや倉庫の片隅に転がっている能野焼。見た目は地味で華やかさは全くなく、時として形がいびつな物もある能野焼。一部の民芸愛好家の間では隠れた名陶として有名だけれど、地元ではそれほど評価されているとは言い難い能野焼。

しかし、岡山県の備前焼ミュージアム館長 白井洋輔先生は、昨年9月に当センター所蔵の能野焼資料を見て、「能野焼は、日本陶芸界の最後のフロンティアですよ！」とおっしゃられました。能野焼は、古文書等の記録がほとんどなく、窯跡の発掘調査もされていないので、その歴史については大部分が不明なままなのです。それ故、「まだまだ研究の余地がある！」と白井先生はおっしゃりたかったのでしょう。

それ以降、収蔵庫に眠っている能野焼達と根気強くらめっこをしているうちに、それまでは全部同じに見えていた能野焼達が、ひとつひとつ違う顔を持っている事に気が付き、どんどん能野焼の魅力に引き込まれていきました。

また、調べていくうちに、八丈島の片口に出会い、それまで未確認だった土管にも出会い、ますます能野焼の世界が広がっていきました。収蔵庫の中では、様々な種類の焼き物が同じ棚に並べられており、その区別に頭を悩ませたりもしましたが、それを逆手にとって「能野焼そっくりさん」というコーナーを作ることができました。

今回の企画展では、高価な骨董品としての能野焼ではなく、地元種子島の歴史の一部である能野焼の魅力をお伝えすると共に、歴史に名を残す事はほとんどなかったけれど、確かに存在したその作り手達の息遣いのようなものを感じていただければ幸いです。

平成30年度 種子島開発総合センター 特別企画展

能野焼・再発見

発行日 2018年(平成30年)4月3日

発行 種子島開発総合センター「鉄砲館」

〒891-3101

鹿児島県西之表市西之表 7585 番地

TEL 0997-23-3215

